

母親へこう書き送りました。へ山なみはどこからみても麓からけわしくそそり立っていて、まるで私たちの上に倒れかかって押しつぶそうとするかのようにおおいかぶさっています……」

「父は二年間だけやってみるつもりでユーコンへでかけたのですが、二年が実際は四十年にのびたわけです……」

「へふしぎだね」ってピーター（バー tonの長男）がいうんです。へだつて、お祖父さんがこの湖にいたことがあるって考えるとね。ぼくたち子供がこんな旅をするようになるだろうなんて、きつと考えもしなかっただろうね……」

## 最もカナダ的な作家

# ヒュー・マクレナン

ヒュー・マクレナンはもつともカナダ的な作家である。一九四一年の「パロメーター・ライジング」をはじめ、それに続く五冊の著作のなかには今や古典となった「二つの孤独」がふくまれている。この作品には、この国の歴史を形成してきたフランス系とイギリス系カナダ人の分裂の様相が詳細に描き込まれている。

マクレナンはケープ・ブレトン島の生まれで、モントリオールに住んでいるが、自分のことをスコットランド人とみなしている（彼の家系は何代も前からのカナダ人なのだ）。従来、彼は説教臭が強い

といわれてきた。以下の引用は、よい作家は小さな町でこそ育つという彼の信念をのべたエッセー「石を落とせば」による。

「自分の町のことなら、町の大金持連中がどうやって一財産作ったか、みんな細かいところまでわかっている。ノイロ



Nakash

ーゼと精神病の違いは知らなくても、ある男を狂暴にし別の男を卑屈にする、あるいはある女を魅力的にみせ、別の女は口やかましくさせる家庭の事情についてならお手のものだ。私たちに、ずっと頭のよい都市生活者には欠けている第六感——つまり時間の感覚というものがあ。私たちは家族というものは、ローマと同様、一日にしてなるものではないことがよくわかっているのだ。」

「ある一つの家族をみてみると、今は亡き祖父について聞いたことを想い出すだろう。彼はいつみてもズボンつりをかけた姿で貸し馬屋の前の椅子に腰をかけたワラをかみながら時折り左手の親指をあげて頭をかいているのだ。いらいらしてかくのか、それとも本当にシラミがいるのか？と興味めくようになっていた。

この家の父親は今も元気だが、金物屋の商売をうまく切り盛りしている中年男だった。こちらは頭はかかないが、よく見ると奇妙なくせがあった。街を歩いていく途中で突然立ち止まり、ズボンの右すそをあげてふくらはぎの後側をかくのである。金物屋にシラミがないことはまちがいない以上、この動作は親譲りのものらしい。かくしてあの老人の不潔さについてのあらぬ疑いは晴らされたわけである。息子の代になってこの一家は一段階昇進した。彼は大学に入り、成績もよく、今ではオタワの行政機構で出世の基礎をかためつつある。おそらく彼は大臣クラスまで昇進して私たちの自慢の種になることだろう。噂では、首相も彼に目をかけているということだ。ちなみに、彼が体をかいているところはまだ誰も見たことがない。」

## TVの科学番組を担当する 遺伝学者

# デイヴィッド・スズキ

デイヴィッド・スズキは一見テレビのカッコいい若い刑事に似ている。ししゅうの入ったデニムのシャツでスポーツ・カーを歩道にまでぶつとばすあれである。事実彼はテレビのスターだし、時にはししゅうのシャツも身につける。しかし一方では、寒くなると死ぬ果実バエの变种を培養して、害虫を抑制する新種を作り出した、レッキとした遺伝学者なのである。

今年四十三歳のスズキは、年よりも若くみえる。現在科学界でどのようなことが進行しているかを専門用語を使わずに一般の人々に知らせる、カナダ放送協会の「サイエンス・マガジン」という番組の主演としてカナダ中で有名だ。

科学は我々を救う前に破壊させてしまうこともありうる。スズキは考えている。なかでも遺伝学は彼の主たる心配の種である。オックスフォードでは科学者たちはネズミの胎児からとった細胞をメスのハツカネズミに移植して、七〇パーセントがハツカネズミで三〇パーセントがネズミという子孫を作り出した。さらに驚くべきことには、人間の細胞をネズミや魚や鶏の細胞と結合させた科学者さえ存在するのである。今まで存在しなかったような生物を創造できるのである。だが、こうした人々の思慮分別をスズキは信用していない。

「こういう人々の行為を私は疑問だと思えます……。もしノーベル賞をもらえようような実験をやめなければならぬことになったとしても、この連中は決して